

# 所沢の民話

(旧所沢市史より)

## 「河童の詫び証文」

北秋津持明院のすぐ南、久米との境に柳瀬川の深いふちがあり曼荼羅（まんだら）ぶちと呼ばれていました。

昔、ここには河童が住んでいて、毎年中元になると、川底から続いている穴を通して笹井の竹坊（狭山市水富）と、伊草の袈裟（けさ）坊（比企郡川島町）へみやげ物として、曼荼羅ぶちで取った人間の「はらわた」を持っていくことになっていました。それだから、人々は恐れて川へ入らなくなったので、河童は中元のしたくができず大変困っていました。

ある日のこと久米の馬子が、馬を川岸の草むらにつないでおいたところ、突然悲鳴をあげました。驚いてかけつけると、十歳ぐらいの子供の頭ほどある河童が、馬の腹に食いついています。きっと人間の「はらわた」がどうしても手に入らない河童は、馬の「はらわた」でもと食いついたものでしょう。

そこで馬子は大急ぎで馬を草むらから引き出し、持明院の坊さんに頼んで説教してもらいました。そのとき、河童は涙をこぼしながら「今後、この土地の人に決して悪いことをいたしません」という意味の証文を、坊さんに渡して許してもらいました。

そしてそれから後は、人の「はらわた」を取らなくなったとのことでした。

この河童のわび証文は、永く持明院に伝えられていましたが、惜しいことに火災によって焼けてしまったそうです。

## 「とんぼの宿り木」

昔、秋津村に無理なことばかり言って、村人たちを困らせていた殿様がいました。ある秋の晴れた日、散歩に出た殿様は、家来に「お前たち、あのとんぼが取れるか」と言いました。家来たちは、また無理難題かと思っていたところ、案外やさしいので「はい、取れます」とすぐ返事したら、「ではわしの年齢の数だけ取って参れ」との命令です。家臣たちは案に相違して、これはまた無理な、とは思ったが命令通りにしないとどんな目に会うかわからないので本気で追い回しました。小半時ほどかかったが、多くのとんぼは川を越えて隣の国へ逃げ、捕まえたのは殿様の年齢の一つ足りません。

殿様は大そう腹を立て、捕まえたとんぼを一握りに握りつぶし、すぐ近くの日月大明神の祠に向かい「これ祠の主、お前が神として力があるなら、このとんぼを別の木にして見せろ。出来なければ祠は取りこわすぞ。もしできたら、わしはもう無理を言わない」と言いざま、ハッシとばかり、御神木の樫に投げつけました。すると不思議、樫の木のまたから、榎がはえ出しました。それと同時に、無理殿様は言葉が話すことができなくなり、二度と再び無理難題を言うことができなくなってしまいました。

この殿様の住んでいたところは、柳瀬川の北側にある北秋津村であり、とんぼが逃げて行ったところは、多摩郡南秋津村（現在の東村山市）と言い伝えられています。